

# 森田慶一の「建築論」の 所在究明

西村 謙司 日本文理大学 工学部 建築学科

## 1. ウィトルーウィウスの建築論

『ウィトルーウィウス建築書』(De architectura)は、都市・建築事業が盛んになった帝政ローマ初期に編纂された建築教本である。その序論に建築論に関する記述がある。それは、次のようなものである。

建築家の知識は多くの学問と種々の教養によって具備され、  
この知識の判断によって他の技術によって完成された作品もすべて吟味  
される。

それは制作と理論から成立つ<sup>①</sup>。

① 文献1, pp.4-5

建築に関する「理論」に先立って「建築家の知識」が問題にされ、それが「多くの学問と種々の教養」を修めることによって十全に働くとともに、「制作と理論」によって成立するとされている。〈建築家〉の「知識」(scientia)は、「理論」(ratiocinatio)と「制作」(fabrica)の上位概念であるとともに、それらが対になって、車の両輪のように、二つが一つとして働くことによって真に成立するものである。そして、その知識の判断によって「他の技術によって完成された作品もすべて吟味される」と言うのであるから、「建築家の知識」は、他の諸々の技術を統率し、全体をまとめあげる最高位の判断力を有する知識であり、建築に関わる者が、〈建築家〉として事業を行う際に求められる必然的な知識となる。

では、そのような知識は如何にして修得され、記されうるのであろうか。また、現代で言うところの「建築論」とは、それが「制作」との関係の特徴とするにしても、上記の「理論」(ratiocinatio)のことであろうか、それとも〈建築家〉の「知識」(scientia)を指しているのであろうか。

先ず、「建築家の知識」の修得に関しては、次のように、〈建築家〉教育の指針とともにその修得方法が示されている。

建築の学問は多岐多数の知識で修飾され豊富にされているので、

子供の時からこれらの学問の階段を登って  
文学や技術の膨大な知識に養われ、  
建築の至高の聖域に到達するの  
急に正当に建築家の職に就くことは不可能だとわたくしは考える<sup>②</sup>。

② 文献1, pp.14-15

〈建築家〉になるにあたって、「文学や技術」を学び、多岐多数の知識を修得し、「建築の至高の聖域」(summum templum architecturae)への到達がめざされるべきことが記されている。具体的な学修項目も、別に「建築家は文章の学を解し、描画に熟達し、幾何学に精通し、多くの歴史を知り、努めて哲学者に聞き、音楽を理解し、医術に無知でなく、法律家の所論を知り、星学あるいは天空理論の知識をもちたいものである<sup>③</sup>」とされ、これらの学問を段階的に修得することによって、「建築家の知識」が十全になり、その内容が「理論」と「制作」ともなって表現されていくことによって〈建築家〉としての職能が全うされていくのである。つまり、「建築論」が「建築家の知識」の表現であるとすれば、それは「建築の至高の聖域」をめざす〈建築家〉としての自覚とともに発語され知的に記されていくものであることが期待されているのである。

③ 文献1, pp.6-7

しかし、ウィトルーウィウス自身、「一人の人がかくも多様な事柄に一々完全無欠を追求することは不可能である<sup>④</sup>」と述べているように、現実には、諸学諸芸を完全に修得し、「建築の至高の聖域」に到達するのは困難なことである。そこで、「あらゆる書き物に同じ特徴を認め、あらゆる学問の共通性を認め<sup>⑤</sup>」とあるように、諸学諸芸の「特徴」、「共通性」に着眼し、その「原理」を修得するようにして学修を深めていくことが肝要になる。つまり、物事の特徴と共通性、さらには原理的事象への着眼によって、物事の全体が本源的な共通性を基盤として体系的に成立していることができるようになるのである。そのような仕方で、「建築の至高の聖域」がめざされ、「建築家の知識」が修得されていくのである。

④ 文献1, pp.16-17

⑤ 文献1, pp.16-17

ちなみに、森田慶一は、『建築論』の〈西洋建築思潮史〉の中で、〈建築家〉を示すギリシア語 architectōn が、archē (初・原、原理、首位・頭の意)と tectōn (工匠・職人の意)の合成語であることから、ギリシア人が〈建築家〉を「原理的知識をもち、職人たちの頭に立ち、諸技術を統べ、制作を企画し指導する工匠<sup>⑥</sup>」と理解していたとし、ギリシア時代の〈建築家〉が諸技術を統べる最高位の職であるとともに、「原理的知識」を有する工匠であったとしている。つまり、architectōn という言葉の内に既に「原理」を意味する archē という言葉が含まれているのであって、この archē への着眼と内化が〈建築家〉のアイデンティティを成立させているとするのである。さらに、森田は、「プラトンは、万有、あらゆる存在、の本源としてアイデアを想定<sup>⑦</sup>していたとし、archē とアイデアの関連性を示唆している。あらゆる存在の本源としてのアイデアを現実世界に写

⑥ 文献2, p.161

⑦ 文献2, p.162

し建てるのが〈建築家〉の職能の一と見ていたと考えられる。

その森田によると、『ウィトルーウィウス建築書』のなかで「建築論的」な文章が記されているのは、「第1巻第1、2、3章、第3巻、第4巻<sup>8</sup>」であると言う。その中の骨子を示しているのが、以下の文である。

⑧ 文献3, p.18

建築は、ギリシア語でタクシスといわれるオールディナーティオー、ギリシア人がディアテシスと呼ぶディスポジティオー、エウリュトミア、シュムメトリア、デコル、ギリシア語でオイコノミアといわれるディストリブーティオーから成立っている<sup>9</sup>。

⑨ 文献1, pp.22-23

ここで示された六つの概念は、ギリシア語のそれに比せられながら示されているように、元はギリシア人によって発見された概念で、ウィトルーウィウスは、ローマから見て「古典」となるギリシアのあり方を根拠として、建築論を古典主義的かつ原理的に構成しようとしていた。そして、この六つの概念は、後に西洋で展開する theory of architecture の基本概念となり、建築の造形原理とされていくものである。森田の「建築論」研究の端緒となる「ウィトルーウィウスの建築論的研究<sup>10</sup>」は、主としてこの六概念を研究したものであった。なかでも特に重視されたのが、「ある事物の全体および部分が一定の量によって共通に測られうること、割り切れること<sup>11</sup>」を意味する「シュムメトリア」という概念であり、建築に際して、物事の共通性に着眼し、その共通性を基盤に物事の全体を構成することが大切にされていたことを確認することができるのである。

⑩ 文献3, pp.7-129

⑪ 文献2, p.164

また、『ウィトルーウィウス建築書』には、建築術が「強さと用と美の理が保たれるようになさるべきである<sup>12</sup>」と記されており、建築術が実践される場面において「強さ」(firumitas)「用」(utilitas)「美」(venustas)が原理的に重要であることが指摘されている。森田は、これもウィトルーウィウスの建築論的記述の一つとし、後に自らの「建築論」の拠り所としていく。そして、衆知のごとく、この三要素は建築術の基本原則として、現代にまで通用している。

⑫ 文献1, pp.30-31

要するに、『ウィトルーウィウス建築書』の「建築論的」部分では、建物の六概念と建築術の三要素が原理的に捉えられ、「建築家の知識」の枠組みを構成していたと考えられるのである。

## 2. 森田慶一の建築論

森田は、「建築論一般について」で、建築論議を次の三つのタイプに分類している<sup>13</sup>。

⑬ 森田慶一：「建築論一般について」、『建築雑誌』, pp. 711-712, 日本建築学会, 1972年7月

1. 建築批評、2. 建築論各論、3. 建築論(建築存在論・建築哲学)

1. の建築批評は、個々の建築物、建築家を対象とし、主にその造形に関する感想、意見、論述である。しかし、それは個々の建築物や建築家の内実を明らかにすることにとどまり、他のそれとの共通性や共通基盤を明らかにすることを目的とするものでない。2. の建築論各論は、住居論、建築技術論、建築芸術論、建築経済論、建築モード論など、建築学の学際分野との関わりを問題にしなが、個々の主題の内実を明らかにするものである。しかし、各論相互の関係性や共通性を問題とせず、それぞれの主題の意義を重視してされる議論である。森田は、西洋の theory of architecture を「建築芸術論」の思潮とし、各論の一つとみなしている。そして、3. の建築存在論や建築哲学と言われる上位の「建築論」が森田の理想とする建築論である。その「建築論」は以下のように定義される。

「建築とは何か」という問いかけに答えるための知的作業、  
すなわち建築なるものの本態を明らかにしようとする理論的発言、の  
総体<sup>14</sup>

14 同上, p.711

建築論各論の共通性に着眼し、それを体系化する上位の「建築論」であるとともに、「建築」自体のあり様を反省的に問題にし、その普遍的な問いに応えうる根拠と本源的なあり方を究明し、言論化する試みであることの云いであろう。加えて、「建築論」の定義は、森田の『建築論』でも繰り返し定義され直している。以下、重要なものを選択し、森田の「建築論とは何か」という問いを見直しておきたい。

15 文献2, p. i

● 建築の存在の意味を概念的に思考し、(中略)、組織的・齊合的に応じる<sup>15</sup>。

16 文献2, p. 5

● 制作において建築家に反省の道筋を示す<sup>16</sup>

17 文献2, p. 3

● 建築論とは「建築とは何か」という問いに答えるためのいろいろな形の論議をひっくるめて指す<sup>17</sup>

18 文献2, p. 6

● 建築論を、建築を全一的に捉えてその本質を探究する理論的・体系的な考察と規定する<sup>18</sup>

これらの定義を見ていくと、森田「建築論」の課題が見えてくる。すなわち、「建築論」の目的は、1. 「建築」の意味を解明すること。2. 「建築」(建築なるもの)の本質(本態)を解明すること。であり、その方法は、知的、理論的、体系的、組織的、齊合的、存在論的に行われ、それによって「建築」の本質が、「全一的に」、探求され、捉え、明らかにされることが期待されている。

そして、幾通りかの定義の中でも、一文でよくまとめられているのが、最後の「建築を全一的に捉えてその本質を探究する理論的・体系的な考察」である。

これは、森田「建築論」の課題を明らかにするため、多くの研究者が問題にしている文章でもある。加えて、この文章の鍵語である、「全一的」、「本質」という言葉の意味の解明が次の研究課題になっている<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> 市川秀和：『「建築論」の京都学派——森田慶一と増田友也を中心として』、近代文藝社、2014年などを参照。

この両者が問題になるのは、先述のように、「建築」(architecture)の語源がギリシア語の *archē* に由来しているからでもであろうが、〈建築家〉の職能、例えば、「建物」を建てる際にその制作過程の全てに関わりながら、その全体をまとめあげ統率していくといった〈建築家〉独自の制作行為の特徴から、この両者が〈建築家〉にとって重要な鍵語であることを確認することができる。そのことに関して、森田は次のように述べている。

建築の目指すものは、人間の生存・生活のすべての面に係わり、人間そのものに密着していて、途方もなく複雑なのである。だから、「建築する」という造物行為は多面的な目的に向かってなされ、結局建築という一つの作品を生むのである。この終局目的に達するための多くの目的系列を整理し、建築を全一的に把握しようとする知的欲求が生ずるのは当然である。建築論はこの欲求に応じようとするものである<sup>20</sup>。

<sup>20</sup> 文献2, p.5

「建物」の制作は、それが機能特化された特殊なプラント施設でない限り、多くは「人間」との関わりの中で形成されるものである。その限りで、建物は「人間の生存・生活」の全てに関わる可能性がある。そして、そのことを真摯に受け止めて制作行為が為される場合においては、制作行為は、多面的で「途方もなく複雑」な行為となる。しかしながら、「建物」は、終局的には一つの全体像をもつ物として完成されて提示されることが期待されているので、「建物」の制作を行う者は、人間的事象がいくら複雑であってもそれを一つの物としてまとめあげなければならない。その故に、建物の制作者つまり〈建築家〉に、物事を原理的に捉え「建築を全一的に把握しようとする知的欲求が生ずる」のは当然だとしている。そして、〈建築家〉の職能に照らして言うならば、「建築論」とは、そのような「人間」との関わり合いの本来的な在り方を大切に、物事を原理的に解し「全一的に」建物を制作する〈建築家〉に応じて知的言語をもって体系的に論を展開していく試みだと言えよう。

また、先の森田「建築論」の定義では、「建築論」の目的が「建築」の意味を解明することであったが、これは如何にしてなしうるのであろうか。

例えば、辞書に倣って、1. その言葉の使用例から意味を限定したり、2. 語源を探ることを手がかりとしてその言葉の意味の広がりや究明する方法がある。後者を「建築」に適用すれば、この言葉が、現代では中国や韓国でも使用されているが、もとは「普請」を意味する日本の近世末の造語であることが知

られている。前後して「architecture」の翻訳語として用いられるようになったと考えられる。そのため、「建築」という言葉の意味は、西洋で展開した「architecture」という言葉の語源探索によって解明される可能性が示される。その一つが〈西洋建築思潮史〉で森田が明らかにした定義であり、さらに増田友也が「建築とは何か<sup>④</sup>」(仮題)で詳細にその解明を試みている。

④ 文献4, V巻, pp.333-409

また、前者を適用すれば、「建築」という言葉は、一般に、名詞、動詞、(動名詞)として用いられることから意味が限定されうる。例えば、名詞としては、「建物」、「建造物」のことを意味する。そのため、「建築」(名詞)の具体的な意味の解明は、建物の様相、様態を造形的な観点から明らかにすることによって試みられうる。西洋の中で繰り上げられた theory of architecture (建築論)の主題の多くは、建築造形原理であり、ウィトルーウィウスが問題にした建築の六概念に応じて展開された議論に接続するものであった。建物の造形原理の究明によって、「建築」の意味の解明が試みられたと考えられる。

さらに、「建築」が動詞として用いられている事例に着眼し、「建築する」こと、すなわち、建築行為のあり方を具体的に明らかにすることによって、その意味を解明する可能性がある。建築行為は、建造術や建築術といった技術行為と解することもできるが、建築設計の計画や構想段階も含めると、制作論的な観点からの議論も成立する。さらに、つくられた建物に「住む」ことの構想も建築制作に内在するので、「建築」の意味を明らかにする試みとして、つまり、建築論として、「住まう」ことのあり方の究明を含めて議論を展開していく可能性がある<sup>⑤</sup>。

⑤ 中村貴志：『ハイデッガーの建築論——建てる・住まう・考える』, 中央公論美術出版, 2008年や玉腰芳夫：『すまいの現象学——玉腰芳夫建築論集』, 中央公論美術出版, 2013年などを参照。

### 3. 森田慶一の『建築論』

森田の「建築論とは何か」という問いに対する答えは、著作『建築論』の構成そのものを見ることによっても確認できる。すなわち、『建築論』は、1.〈建築論概説〉(含：「建築論の特殊問題」)、2.〈西洋建築思潮史〉、3.〈ポール＝ヴァレリ エウパリノスまたは建築家〉によって構成されている。多面的に広がりうる建築論の論議が原理的に三つにまとめられていると考えられる。

まず、〈建築論概説〉では、建築の四つの存在様態(物理的、事物的、現象的、超越的)から導かれた四つの性質(物体性、効用性、芸術性、超越性)が問題にされるとともに、その個々の存在様態の相関のあり様が明らかにされている。すなわち、ウィトルーウィウスが建築術を原理的に捉え、主たる論点として提示した「強さ」(firumitas)「用」(utilitas)「美」(venustas)という建築術の三要素が前提とされ、それを継承していく仕方で、全体が構成されている。ウィトルーウィウスは、この三要素の重要性を指摘するものの、その内実に関する議論を深めているわけではなく、森田の「ウィトルーウィウスの建築論的研究」でもあま

り触れられることはなかった。そのことを踏まえ、森田自身がこの三要素について建築論的観点から論述を試みるとともに、新たに「聖」なる概念を付加して議論を深化させている。そして、四つの論点の相互の関係を明らかにすることによって、造形的な観点からの「建築論」を「全一的」にまとめあげようとしている。

ただし、ここで問題にされている「建築」は、既に指摘されているように、「実在の建物」のことであり、形ある「建物」の建造が主題とされた議論である<sup>24</sup>。実際に森田は、「建築論を体系づけるにしても、それはあくまで建築の領域内での体系化であって、それだけで建築の課題がすべて網羅されているわけではない。建築は、一つのまとまった世界を形成している大きな人間の文化的営みであるから、その全貌を真に理解するには、当然、文化全体の中での建築の位置を把握する必要がある。すなわち、建築世界と他の文化世界——たとえば、経済・政治・思想・宗教など——との交渉・関連において、建築を外から見つめる必要があることは言うをまたぬ。このようないわば外からの建築論も成立するであろうが、われわれは、ここではもっぱら内からの建築論に留まることで満足しよう<sup>24</sup>」と、建築の「内」からの議論で満足するとしている。つまり、〈建築論概説〉は、建物の造形が主題とされる限りでの議論であり、その範囲に限定されて論述された「建築論」の一なのである。

しかし、この造形的観点からの建築論の論点は、「空間」や「時間」と〈建築〉の関係が問題になってくると、「空間論」として展開する可能性を導き出している。さらに、「聖」性の問題を主題化して、建築の領域外の学問との関わりの中から論じられる「宗教建築」や「日本住宅」の「空間論」、「場所論」、「風景論」の研究が進展する契機となっているのである<sup>25</sup>。

また、『建築論』では、〈建築論概説〉に続けて、「建築論」の既往研究のレビューとも言える〈西洋建築思潮史〉や近現代建築の思潮、日本建築の表現の特質が述べられ、古今東西の全域へ視野を巡らせて建築思潮の流れが明らかにされている。建築思潮史を解明するとともに、歴史的事象の比較の中から建築の本質を解釈学的に明らかにすることによって本質的な「建築論」の定著が試みられている。建築思潮史は、建築思潮の解釈の仕方や着眼点によってさまざまに展開される可能性があり、その後も多くの研究者によって研究が行われている<sup>26</sup>。

『建築論』の三構成のうち、最終部には、「建築における古典主義を最も厳格に美しくわれわれに示してくれる<sup>27</sup>」という〈ポール＝ヴァレリ エウパリノスまたは建築家〉が掲載されている。これはソクラテスとパイドロスによる建築家エウパリノスに関する対話篇である。ここでは、エウパリノスが述べた「制作には細部なるものはない<sup>28</sup>」から説き起こされる建築の〈全一性〉や「ぼくの神殿は、愛されるものが人を動かすように、人を動かさなければならぬ<sup>29</sup>」

<sup>24</sup> 田路貴浩：「森田慶一による建築論の根本課題に関する存在論的再構築」、『建築史学』、56巻、p.97-123、建築史学会、2011年

<sup>24</sup> 文献2、p.7

<sup>25</sup> 前川道郎：『ゴシックと建築空間』、ナカニシヤ出版、1978年や増田友也：『家と庭の風景——日本住宅の空間論的考察』、ナカニシヤ出版、1987年などを参照。

<sup>26</sup> 元良勲：『ギリシアに於ける建築的秩序原理の研究』、京都大学博士論文、1956年や相川浩：『建築家アルベルティ——クラシズムの創始者』、中央公論美術出版、1988年などを参照。

<sup>27</sup> 文献3、p.266

<sup>28</sup> 文献2、p.234

<sup>29</sup> 文献2、p.238

に拠って〈美の永遠性〉が問題にされ、芸術として建築の創作に挑む愛知者としての〈建築家〉の内実が説かれている。不滅の美と叡知を追究する〈建築家〉の創作のあり方を主題とした対話篇をそのまま掲載することによって、「全一的」なることを主題とする制作論的観点からの「建築論」が位置づけられようとしている。

⑩ 文献3, p.269

⑪ 文献2, p.247

また、ウィトルーウィウスの強さ、用、美に対応して、「沈黙」「語る」「歌う」建築の意義が説かれている<sup>⑩</sup>。特に、「それはぼくがそれに与えたものをぼくに返している<sup>⑪</sup>」という「歌う」建築の創作が、人間存在の全てがかけられてはたらく魂の力を契機とした美の追究によって行われるもので、魂の力が内在し、本質的に人間的な物象として成立する「歌う」建築の有意義性が強調されている。そして、そのような「歌う」建築の形象は、具象的かつ抽象的で、感覚と同時に理性・数によって構築され、「人間の真の創造物<sup>⑫</sup>」になるとされる。その意味で、「建築は法則を形象に還元する芸術<sup>⑬</sup>」とされ、言葉を媒介として成立する幾何学的形象によって、多くの人々の心の琴線に触れる共通性を有する物語性を帯びた作品として結実するものであることが説かれる。そして、そのような言葉とともに在る「沈黙」「語る」「歌う」建築を制作することが〈建築家〉の職能として求められると解されるのである。

⑫ 文献3, p.271

⑬ 文献3, p.271

すなわち、森田は、『建築論』を通して、ウィトルーウィウスが提示した建築術の三要素(強さ・用・美)に依拠しつつ、1. 歴史的に繰り広げられてきた建築思潮から建築の本質を探究するという建築思潮史研究という方向性、2. 「建築」を名詞として解し、建物の造形原理を主題として議論されてきた theory of architecture に拠る「建築芸術論」、「空間論」、「場所論」という方向性、3. 「建築」を動詞として解し、建築術や建築制作のあり方に着眼した「建築制作論」という方向性という三つの論点を軸とした議論の枠組みを提示したのである。さらに言えば、森田は建築論各論の共通性として〈強さ・用・美〉を捉え、それを全一的「建築論」構築の原理的要とし、〈建築思潮史〉・〈建築造形論〉・〈建築制作論〉という森田「建築論」の基本的枠組みの三本柱に縦横に展開させていく仕方で上位の「建築論」を構成し、その全体を『建築論』としてまとめあげたのである。つまり、『建築論』は、書名の表記であるとともに、〈上位の「建築論」〉を意味する言葉であったと考えられるのである。また同時期に、「建築以前」、「建築論の論」を鍵語とした議論が展開するが、増田が「建築以前(退官講義)」で「私自身も森田先生の手のなかから一歩も出れていないということ、また出ようとも思わない<sup>⑭</sup>」と述べているように、森田の提示した枠組みの表裏と解される範囲内の議論であり、それは『ウィトルーウィウス建築書』で示された〈建築家〉として在ること、そしてそこにとどまることが「建築論」の枠組みを保持しうる限界だと考えられたことに拠ると解される。

⑭ 文献4, V 巻, p.286

## 参考文献

- 文献1 森田慶一訳註：『ウイトルーウィウス建築書』，東海大学出版会，1969
- 文献2 森田慶一：『建築論』，東海大学出版会，1978
- 文献3 京大建築会編：『森田慶一建築論集』，彰国社，1958
- 文献4 増田友也：『増田友也著作集』，ナカニシヤ出版，1999